

義
經
新
高
館



義經新高館

作者 紀海音

序地兄弟はこれ手足たり。夫婦の中は花衣。色染めかへて新にす。連なる枝を離れては。元の根ざしを得難しと。筆にいはせて教置く。オロシ清む大道の。源や。地叔も九郎判官殿謀反の企おはす由。市に街にとりぐに言ひふらしたる根無草。鎌倉殿の殿中には。秩父北條和田上總。晝夜御前に相詰めて。萬民快樂の御籌策。フシ評定有るこそ目出度けれ。地斯る所へ奥州より。秀平が後家正貞尼。次信が母佐藤の局。權の頭兼房。地判官殿より使者として。頼朝公へお目見えを。願はし顔に虎の間の。フシ廣庇にぞ相詰むる。地稍有りて奥よりも畠山重忠。文覺上人相伴ひ三使に對ひのたまふ様。詞遙々の御上り我が君にも何程か御満悦に思召す。少と御風氣に御座有る故御對顔は追つての儀。義經公の御口上文覺御坊と某に。仰聞けられ候へと大やうに挨拶有る。三使首を疊につけ。主君義經我我を差上し候段。全く別儀に候はず。御通枝の中近年は御疎意がましく見ゆるに就き。事を好める徒者。虚説を構へ色々と。有られぬ風聞致すにつき。萬一御耳に達しては。地御機嫌の程いぶかしく。地虚名を申開かん爲。參清致し候と。フシ謹て相述る。地重忠少しえせ笑ひ。詞仰の如く下々の轉事を取上げて。申すべき様有らねども。地楊震四知の戒を。憚りたまはぬ義經公。詞此頃の御振舞不審なきとも申されず。愚意に落ちざる一通り尋ね申さん聞き給へ。此度南都東大寺の大佛供養に事を寄せ。似せ山伏に様を變へ關所を通りたまふ事。狼藉不禮の其一つ。取分け富樫の關所にて辨慶が讀上し。勸進帳の願文に諸人の助力を頼んで。功德を本朝に止んと。是頼朝の二字を分け中に文字を切入れしは。君を亡し義經の威を本朝に顯はすとの。巧の詞にあらざるや。扱又諸方の浪人者。忍び

忍に奥州へ召集められ候事。反逆の儀ならずして。何等の御用候ぞ。承らんと有ければ。兼房願ふけ色もなく。ハ御尤ざりながら。憚多く候へども一々申し開くべし。此度奥州下向の節所々に新關據りし由。押て往來致す儀は後日の咎を憚かりて。主從僅か十三人姿を略し候事。頼朝公へ親兄の禮を守つて致せしなり。勸進帳の願文に怪しき詞候由。其儀は辨慶一人が才覺を以つて當分の。難儀を遁し迄の事。地併し世上の取沙汰を氣の毒に存じてか。高館を逐電して在所知れず成候。詞叔又諸國の浪人ども。忍んで参り候事招寄するに有ねども。地先年八島一の谷所々の軍に我が君の。恩顧を預者どもが尋下り候段。是非に及ばず候と。流るゝ水のよとみ無く。フシ斷り立てゝ申すにぞ。文覺坊も重忠もくわん／＼と打領き。詞ホ、申されたりいはれたり。宜敷御披露申すべし。地君の御機嫌知ねども。兼て御坊と某が。相談致せし事ども有り先づ第一は義經公。高館にましましては諸人安堵の思ひ無く。風説日々に増るべし。西國方へ御居城を。御開き有る物か。外様の諸武士同然に鎌倉表の役儀をば。御勤なさるゝか。京の君をば人質に御出し有るものか。地三色の内を何れにも。御同心有るならば。君も御安堵成れんと。いひ並べたる辯舌の。落ちた所は文覺が。拾ひ上たる談義口如何／＼と尋れば。三使はとかうの詞なく。フシハット溜息つき居たり。地兼房心に思ふ様。斯く大切なる事どもを。文覺坊や重忠が私にいふ事ならず。上意を受けての三ヶ條違背申さば忽に。事の破れは知れた事一期の浮沈なりと。とつゝ置いつ思案して。詞先づ以て御懇志の内意を仰せ聞けられて。千萬満足仕る。某とても御主人の所存の程は存ぜね共。秀平譲りおかれたる城をお開き有ることゝ。外様の諸武士同然に役儀を勤め候儀は。中々得心候まじ。地京の君を人質に出し申す儀は。兼房か。主人へ何ふ迄も無く。慥に受合候と。詞を放てば正貞尼。詞ハ是々權の頭。疎忽な返答なさるゝな。家にも國にも日本にも代へじと思す姫君を。地人質にとは我が君の。何しに承引遊ばさん。女ながら我々も。使の數に加はれば。なぜ相談致されぬ。受持顔の有様と。聲を揃へて罵れば。地兼房尻目に睨付け。詞成程三使と言ひながら。斯く大切の場に成りて

は。地女中の智慧に及ばぬこと。人質の儀は昔より。其例あまた有る事と言はせも果す佐藤の局。詞ナウ舌長な權の頭。其身に疑ひ有るときは人質は扱置いて。意狀誓紙もする習ひ。疊らぬ君がお心を申開きに遙々と。地龍りのぼりし甲斐もなく。姫君様を入質に。出せと有るの御返事は我々は得申すまい。詞サア誤に成る時は某切腹するばかり。地兩所へ御難は掛けまじと。思ひ込んだる有様に。重忠文覺笑つぽに入り。一段くさもあらば。貴殿は暫らく逗留あれ二人の尼公に御用は無い。早々國へ歸られよと。フシ愛想も無き挨拶に。地ハツト返事もそこく。むつと顔して立か弓。彌猛心を押静め。前後の首尾を兼房は。分別といひ年配も。家中で一の上坐をば捌く。器量と。三重見えにけり。浮世ぞと。思捨ても跡よりは。平泉にし仕馴れて。翌日知ぬ身を京の君。宿直の女中諸共に。地庭もせ近く出でたまふ。寝起の帯のしやら解もはてゝはすはで徒で。フシ命とりなる姿なり。地和泉が女房花卷は。お側へ寄つて笑顔して。嬉しや今朝はいつくよりお心輕き御顔。昔の玉の床とてもお命有りての上の事。葎生ひたる宿ながら御夫婦一所にましませば。又なき闇のお樂。地男見るめと降雪の。白さは爰も同じ事。お口ずさみ候らはば。ちと御聞せ給れと。オクリ料紙引寄。フシ墨摺れば。地妹の青柳さし出でてまた頑な歌咄。お氣の詰るに置きやんせ。詞花時鳥月雪より。地只面白いはぬれ咄。サア女房達爰へ出て面々が身の徒を。かくさずと白狀しや。殊におらんは此頃に。異つた色が取たげな。マアお姫様聞しやんせ。詞彼片岡の八郎殿あつたら器量持ちながら。身持の固き公道さ。そのく仕業といふ事が。地身の廻りなら大小なら。道具といふては家内に簾屏風一枚。さもしい事ちやが朝夕にごとう味噌ばかり参るとて。異名を付けて御家中で後藤くと呼びます。其わか殿がどうしてか爰なおらんに打込んで。戀煩ひをなさるゝげな何と嘘では有るまいが。最早逢うたか叫うたか。フシ明せくとなぶられて。地おらんもふつと吹出し。詞夫には可笑い咄が有る。成程貴様が聞通りわしもあんまりいやでも無し。地首尾をつくつてこちらから寢間へしかけて懷へ。ぐすと這入とする所を。詞むくくとして起上り三指ついて巻舌で。御

所持の珍物打おかず。賞翫せよとの御深切。大悦至極つかまつる。併しながら拙者めが。懸幕に存るおらんとは其元様には候はず。近年天下太平にて双に血をば見ざる故。積鬱々湛々にて。連れ軍が始めかし。地おらんが見たい戀しひと。佛に立ちさふらふと。鼻あかされて戻たと。フシどよみつくつて笑ひける。地女中達は口々に。龜井殿の異名をば。長門櫓とは青柳殿こなが日を知つてどある。詞それや問はいでも知れた事。地柳の糸の結ばほれ戀の亂れを解きわけける。長門櫓又水櫓の掣がお腹に早七月。抱付心しめ心ぐはひのよさは長門。印籠。腰の廻りにひつ付いて。朝晩みても飽くまいと。さし合くらぬ高唱し。地京の君は打笑ひ。詞花卷一人まじくと押だまりやるも小憎てな。夫和泉の三郎を眞田紐とは妹と背の。地縁は切れても切れぬとの。かね言成るか談しや。詞イエ／＼左様ぢやござんせぬ。地親と親との許婚。嫁入する迄待兼て。或宵闇の中二階寄れ組まん尤もと。引寄せてしつかとしめ。地暗さは暗し箱梯。ころり／＼ころ／＼と。組んで落ちたる其音に。母様が駈着けて。どうもとうはが出なんだが。同上が眞田か。下が股野かと。地仰せられしといひさして。襟を嚙やら手を打つやら。フシ女子仲間ぞやかましき。地斯る折ふし鎌倉より。二人の女中御歸りと。呼はり次いで。フシ入來れば。地義經公を始めとして。錦戸太郎安平。伊達の次郎元衡。龜井の六郎重清。片岡八郎經春。フシ各座席に連りて。地鎌倉表の御首尾は如何に／＼と尋ねれど。地佐藤の局も正貞も。とかうは無に涙ぐみ。さし俯いて居たりけり。詞判官眉を顰められ。はて氣遣しき有様な。首尾の善惡眞直に包す語れとの給へば。二人少く顔を上げ。御對面さへ許されず追返されし我々故。よし惡の儀は存せねども。兼房一人相残り。地秩父文覺相談にて。姫君様を人質の願を立てられ候と。フシ又潛然と泣居たり。ハツトばかりに京の君する／＼と走寄り。詞何自を人質と權の頭がいひしとや。地老にほれたか鎌倉の威勢に心臆れたか。それともに我が心に計ひがたき事なるが。若は密に我が君の。仰付にて有りけるか。お爲に悪き我ならば。御手にかけて今爰で。殺して給へ片時も。別て外へは行くまじと。膝により添ひ取付きて。歎きたまへば判

官人。いらへもやらず。しやくり上。フシ／＼でぞおはします。地伊達錦戸は兼々に。惡しと思ふ權の頭。能い幸と顔見合せ。詞ハ、しなしたり／＼。斯く大切なるお使に不忠の者を遣せしは。御運の末と申さうか。後悔先に立難し。地惡きもにくし彼奴めをば。途中に待受打殺し。武士の見懲にするより外更に御思案有るまじと。焚付けられて胸の火の。くわつと燃立御顔色。地いしくも兄弟計ひたり。天命知ずの老耄め。首取つて見せよとの。仰嬉しく兄弟は。ずつと立つて行く所を片岡向ふに立塞り。期待つた／＼。一言訴訟申す内。そこをばにじり召るゝなど。地はつたと睨み立戻り。御前に。畏り。詞。御尤とは云ひながら御短慮至極の仰付。外様の千人萬人より一人の兼房は。世に大切なる家臣と云ひ。忠義に於て今日迄片時も携ぬ老武者が。疎忽の願ひを致せしも。仔細こそさふらはん。呼返されて邪正をば。御糺明有れかしと恐入つてぞ言上す。兄弟がツら／＼と笑ひ。外様の武士の忠義より家臣の不忠が優るとは。はれ異つたる了簡かな。平生ともに方々が家臣／＼と高振て。人を人とも用ゐぬ故。付くべき味方も氣を變じ。頼朝公に従ふぞ。地。嗜れよと嘲れば。龜井こらへぬ若者にて。ずか／＼と立かゝり。詞。推參なる雜言かな。家臣たる身は一命を君に差上置く故に。一言いふも忠義なり。お主如きは私の意恨を胸に。挿み。善惡知ぬ兼房を討手に向ふは何事ぞ。地。サアコ、一寸でも外へ出ば。忽ち四つにして呉んと。鯉口半抜きかかる義經詞あら／＼かに。詞。ヤア尾籠なり汝等。時世につれて判官が詞も用に立たざるか。地。正八幡も照覽あれ。兼房が義に於いて。ふつ／＼訴訟叶はぬと扇を以つて御太刀を。丁々と打ち給へば片岡龜井は是非も無く。スエテハツトばかりに押退去る。地。錦戸伊達の兄弟は。天晴小氣味義經の。御意にあふのが威を見せて。立行く姿ぞ。三重憎てなり。地。曉の鐘に連立つ權の頭。地。虚實の中を兼房は。島山が推擧にて頼朝公の御機嫌も。相和ぎて立歸る。使者の面目故郷へは。錦を着よと拜領の。小袖に御紋月毛の駒。踏躡す米塚や増田も跡に陸奥の。浮名取川忠臣の名もいたづらに朽果つる。フシ芭蕉が辻に着きにけり。地。何かは知す向ふより。同勢數百騎群出て。大將と覺しき者眞先につゝ立ちて。權の頭

の貪欲者。老の榮花を極めんとて鎌倉殿に媚諂ひ。主君へ不忠の願事。先達て洩聞え。義經立腹甚しく誅戮せよとの上意を請け。錦戸が執權照井の太郎が向うたり。搦めとらんは易けれども。侍は相互。尋常に腹を切れ介錯致し得せんと高らかにこそ呼はりけれ。兼房顔色血に變じ。緩急なり陪臣ばら。權の頭が不忠とは何者が風説して。君のお耳に達せしぞ。伊達錦戸が年頃の意恨を胸に。挿み。讒佞の辯舌に言廻しての事成るよな。上意ぞならば御家臣の龜井片岡なんどこそ。討手には来るべき。已等如きに兼房が一命を落さんや。地それ打散せと下知すれば。双方一度に。拔連て爰を先途と。三重戰ひける。敵大勢といひながら。義を重んずる若者ども。無二無三に切まれば。少しらけて見えにけり。地照日は大きに腹を立て。侘なま年寄ての腕ずんばい手捕にせんと飛かゝる。兼房かつらりと笑ひ。地年少し寄つたれど。おのれ如きに負くべきかと。曳やつと引寄せ。鞍の前輪に押付て。首掻切て捨てんげり。主を討せて軍勢ども。一度にどつと駈寄るを。太立抜かざし切立つれば。詞には似ずばらくと。フシ廻るに形は無しけり。地斯る所へ横合より。片岡八郎常春一文字に駈来る。兼房馬より飛て下り大地にどうど居すわつて。八郎君の討手よな。介錯頼むといふ儘に。腹を切んとする所を。調ヤレ早まるな暫し待て。其方今度の大略を例の讒人兄弟が。いろ／＼悪く言成して既に討手は乞請しぞ。無實に其身を亡す事餘といへば笑止さに。事を糾さん其爲に忍んで爰に來りしが。京の君を人質とは虚説か但し我が君に。二心有つての義か語れ聞んと云ひければ。兼房は打笑ひ。朋友の誼みとて。能くこそ是迄來られしが。別心かとは曲が無い。鎌倉殿の御所存も諸大名の色めきも。近日に早や高館を攻亡さん御覺悟と。先達て見付けし故。願ひを立て頼朝の。心を暫し宥め置き。急に諸國の兵へ。廻文廻し軍勢を招き集る其間は。假令半年一年でも。京の君は御病氣とて。地延引致す心底に仕畢せ置いたる謀計の。やみくと成りし事天命とは云ひながら。御運の盡くる時節なり。地我が君の生害も。各が討死も。程は有るまい冥途にて。追付け參會致んと。太刀の柄に手をかくる片岡頼て抱きとめ。忠義を胸に押包み。身を果さんとの心は如何に。ア、

愚なり八郎。手前の道理を言開けば。大將の御短慮を。世上へはつと取沙汰しけ今日迄。從魔きたる。地主卒の心が逸る物兼房が悪名は塵芥よりも軽くして。義經公の誤は。大山よりも猶重し。放して殺せ八郎と。悶けど猶も抱とめ。詞尤至極さりながら。汝に一の望有り。是より京都に馳上り後白河の法皇へ。歎をいうて御兄弟。和睦の綿旨を申請け。立歸らんは莫大の忠義にては有るまいか。兼房ハツト勇をなし。主人の短氣は見ゆれども手前の疎忽辨へぬ。地誠にさうぢや誤た。合點がいたか。合點ぢや。合點か。合點合點かと。兩人一度に立上り。最早歸るか。ヲ某は。京へ上つて追付手みやげに。吉左右聞さうぞ。ヲ、頼もしい。夫より内に鎌倉より大軍起つて攻むるとも。呂望子房が智を廻し。君も御堅固我々も。無事で貴殿も息災で。忠義の二字の二腰は。朽ちても朽ちぬ金作。武道の切羽はなし鮫。後藤が目貫獅子王の。天に飛揚し地を動し。刹利も首陀も踏散し。輕軒香車を引きかけて。金殿。玉座に。飛入て恩愛戀慕に身を忘れ友を離るも勢にて。東西へ。こそ別れけれ。

第

二

地東魯の書籍西乾の經に孝は萬行の。父母と説き置きたまふとかや。和泉の三郎忠平は。武勇智謀も文學も。兄々よりは丈夫の儒者の行跡見習ひて。親秀平の尊骸を。埋みし塚の木の本に。フシ暫しとてこそ柴の庵。フシ引結びたる。白衣の紐。解かて別れし其日より。三年の喪に入相の。長地兼て亡父の秘藏せし。白糸威の鎧をば。松の小枝に懸置きて。在すが如く朝夕も。お好の料理手づからに。フシ切め正しく盛並べ向ふに急度給仕盆。調ア、先づお箸なされましよ。お汁に心を付けまして小黒崎のまな鶴に。武隈の懸松茸あしらひに入れました。こちらに指身がござります。衣川の七年鯉今朝程網を入れました。地鰐籠の濱焼は珍しうも候はず。金華山のこだゝみて御酒一つ侑めまし。御膳はさらりと取りまして。宮城野の萩の花。後段に上げたう候ふと問うつ答へつ一人言。フシ殊勝にも亦哀れな

り。地所^{ぢしよ}る所へ妻の花巻^{はなまき}。息をばかりに駆^{かけ}來り。入らんとするを詞^{ことば}を掛け。詞コレヤ／＼女房^{にようばう}。公門^{こうもん}に入る時に鞠躬^{きくう}如^{ごと}たり。入れられざるが如^{ごと}くすとは。孔聖^{こうせい}魯論^{ろろん}の金言^{きんげん}。忠平^{ちゅうへい}が妻室^{さいしつ}とも呼^よぶ者^{もの}が騒^{さわ}しい。ぶしつけな何事^{なにこと}ぞ。ハテそこ所^{ところ}じや無いはいの。地鎌倉^{かまくら}殿より近日^{きんじつ}に大軍^{たいぐん}討手^{うちて}に向ふとて。お館^{やぐち}は今朝^{けさ}より上^{うへ}を下^{した}へ返^{かへ}します。何かは置いてござれないと。急に^{きん}にせいたる赤面^{せつめん}の。顔に流るゝ汗^{あせ}の玉^{たま}。フシ萩^{はぎ}の露^{つゆ}より美^{うつく}し。詞ハ、ハ、いや／＼虚説^{きよせつ}である。棠棣^{たうてい}の花鄂^{はなかく}として鐔々^{てんてん}たらざらんや。よし又眞實^{まじんじつ}なればとて龜井^{かみい}片岡^{かたがわ}などいふ。歴々^{れきき}の御家臣^{みけおみ}あり。外様^{ぐわいさう}には伊達^{いたて}錦戸^{きんこ}。忠平^{ちゅうへい}一人參らぬとて。少^{すこ}も何^{なん}の不足^{ふそく}がある。地佐藤^{さとう}次信^{じしん}忠信^{ちゅうしん}が妹^{いもうと}と生^うれ。きよと／＼と。物難^{ものがた}きは見苦^{みくる}しい御膳^{ごぜん}中^{なかつ}ばぢやそこ退^{ひき}と。睨^{にら}付^けられて花巻^{はなまき}は。詞ソレハこなたに倣^{なま}はねど夫^そに代^{しろ}りお主^{おぬし}への。地お爲^{ため}に死^しるといふ事^{こと}も胸^{むね}にとつくと納^なめて居^ゐる。爰^{こゝ}の道理^{だうり}を聞^きかしやんせ。詞御前^{ごぜん}に於^おて先程^{せんじよう}から。軍評^{ぐんひやう}定^{じやう}とり／＼にて。若殿^{わかつだ}原^{はら}は一戦^{いっせん}に勝負^{しやうぶ}をせんと逸^はり過^すぎ。錦戸^{きんこ}伊達^{いたて}のお二人^{ふたり}は。うち／＼と只^{ただ}御卑怯^{ごひけつ}な相談^{さうだん}ばかり成^なさるゝ故^{ゆゑ}。傍輩^{はうばい}衆^{しゆ}が口々^{くく}に兄弟^{けいだい}なれば三郎^{さぶらう}も。臆病^{おくびやう}風^{ふう}を引^ひ込んで。此場^{このば}へ出^でぬかなんとて。無念^{むねん}なてこと聞^ききまして。私^わしや口惜^{くちやく}しうて成^なりませぬ。何程^{なんぢやう}孝行^{かうかう}成^なされても臆病^{おくびやう}者^{もの}と言^いはせては。艸^{くさ}の蔭^{かげ}にて親御^{おやご}様^{さま}お嬉^{うれ}うはござんすまい。理^りを非^ひに枉^{かま}て來^きたまへと。繩^{なは}り付^けく手を振^ふ放^なし。詞ヤイ三年^{さんねん}の喪^もは天下^{てんか}の通喪^{つうそう}なり。夫程^{そのぢやう}の義^ぎを辨^わへぬ愚蒙^{ぐもく}の族^{しゆ}は。臆病^{おくびやう}とも卑怯^{ひけつ}とも言^いへ構^{かま}ぬ事^{こと}。其上^{そのうへ}兼^{かみ}て扶持^{ふち}し置く。秋山^{あきやま}理助^{りすけ}茂木^{もき}半藏^{はんざう}。顔^{おも}も姿^{すがた}も某^{たれ}が影^{かげ}の如^{ごと}くにて。三人^{さんにん}並^{なら}べば三人^{さんにん}の忠平^{ちゅうへい}有^あるかと汝^{なんぢ}でも。見紛^{みまが}ふ程^{ほど}に拵^{こしら}へ置く此兩人^{このふたり}が討死^{うちし}せば。地正眞^{せいしん}の忠平^{ちゅうへい}が立戻^{たちもど}つて天晴^{あつはれ}な目覺^{めさ}し軍見^{いくみ}すべしと。武^ぶに長^{ちやう}じたる高慢^{かうまん}が。フシ鼻^{はな}へ和泉^{わいせん}の三郎^{さぶらう}に。女房^{にようばう}是非^{ぜひ}も泣聲^{なきこゑ}にて。まる三年^{さんねん}を獨寝^{ひとりね}の。つらきが上^{うへ}にこんなまあ。孔子^{こうし}に倒^{たふ}され果^はつるぞと。オクリ眩^{くら}き屋形^{やがた}に走^{はし}行く。フシ心^{こゝろ}も空^{くう}に。地魂^{たま}も飛^とんで何國^{いづくに}に落^{おち}り人等^{ひとら}。追々^{おひ／＼}に走^{はし}出て申^{まを}し／＼與^よ兵衛^{べゐ}様^{さま}。詞算盤^{そろばん}屋^やの三五郎^{さんごろう}か。お主^{おぬし}はどこへ逃^にげめさる。地どこと申^{まを}して行^い先^{さき}に。一門^{いっもん}は無^なし錢^{ぜに}は無^なし。かたりはしつけぬ商賈^{しょうが}なり。夜尻^{やじり}切^きうも鳥目^{とりめ}なり。漸^{おそ}う思^{おも}ひ付^つきまして安達^{あんた}が原^{がはら}の黒塚^{くろづか}へ。鬼^{おに}の小姓^{こしやう}に參^{まゐ}ります。ヲ、知^しぬは人^{ひと}の身^み

の上ぢや。資本の五十や三十は。有に任せてかけ商ひ小家を持つた不祥には。屋根がへも此夏する。内造作を漸うと。一昨日仕舞うてろくしきに美豆の小島へ退ます。あたふた騒ぐなべがかゝ養ひ君の森岡へ。にじりこもうとと駈走る嫁入せぬ子を羽黒山。落山伏がかひく。數肩に引掛退も有。すつぽん突の竹藏は浅香の沼へと這回る。鞠屋の見利は白河へ繪匠の道佐は屏風島。葛籠風呂敷甥姪と。子をさかさまに泣聲は。オクリ物騒しき景色なり。地忠平不審に思ひつゝ市中を離し山林に。かく騒動は何事と立上つて見るよりも。詞ヤイく夫なる町人ども。察る處汝等は鎌倉殿より大軍が。押寄するとの風説を聞おちをして面々が。家財迄振捨て。狼狽廻ると覺えたり。腑甲斐なきものどもかな他國へさ迷ひ歩んより。大將の下知を請けなせ籠城は仕らぬ。罷返れと云ひければ。皆々一度に首を下げ仰にては候へども。ゑいやつとは武士の役。町人の兵法は。逃るが極意と承る然れども今日迄。油斷致して居りましたも殿様の御事は。日本一の兵。鐵の桶よりも。慥な事と面々に手鼓打つて居りましたに。誰言ふと無く今朝より。ヤレ和泉の三郎こそ鎌倉殿へ一味して。夫故山家に取り籠り。館へ返り給はぬと。騒ぐ程にける程に斯う言ふ内も後から。首切る様に候と。フシ戦ひ慄くばかりなり。地忠平大きに仰夫し。詞ヤアく何と某が鎌倉殿へ一味ぢやと町中の取沙汰が。なか／＼左様に申します。地ハア南無三寶後れたり。下々迄も言ふならば。上の御沙汰も嘸有ん。最前女房が諫めたる臆病の名は厭はねども。二心有る侍と。君の疑蒙るは。父尊靈への大不孝。一片の理に偏て。忠義に眼味き故天汝等が口を借り。戒めたまふか有難や。急なる時に忠孝の。二つは全く立難し。一まづお暇たまはれと。再拜九拜百拜し。面影に添ふ白糸。緋鐙を取つて肩に掛け。取傳たる弓馬の家。弓矢の傳授箱傳授。しつかと締る眞田紐。強い所は目にも見よ聞いても語り傳ふべし。我に追付く町人ども。跡より來れ方々と。飛ぶが如くに鶴準の高館さしてぞ。キホヒ三重馳歸る。フシいでや文治の。地冬の空。四方の梢も霜枯て。頼朝義經連れる枝も越えつと隔たりて。大軍襲ひ来る由高館に相聞え。軍評定とり／＼の。中にも和泉の三郎は。今度の大將承り。己が館を

出城として。雲霞の如き鎌倉勢。只一戦の勝負ぞと。胸に智謀を疊込む。譽は其身一人に二人の郎黨一様の。武者振。鑑太刀指物三人並び立ちたるは。何れを影よ形とも離裏が眼を借らずして。見分難なき有様にて同じく采配おつ取て。士卒の從軍の沙汰いかめしくこそ語りける。

軍 配 團

抑此平泉と申すは。日本無双の要害四陣相應の名城なり。東に山を戴て。朝日輝く。鯨は。魚鱗の備自から。たとへて見るも。フシ逞しき。フシ北に流るゝ衣川。水滔々と高館に。寄せてはさつと引沙の洲崎に。遊ぶ友鶴は。是鶴翼の。フシ詠ぞかし。如何なる強敵。コハリ強兵も。千里が外に嘯き拂ふ虎の門。西に鐵門鱗々々。りんと締めたる其時は。獅子奮迅の勢。ナホスフシ叶ひつべうこそ見えざりけれ。一の櫓は正八幡。八千矛の神。建雷。第二の櫓は麻利支天。日天。月天廿八宿掇。第三は五大尊四方の角は四天王。愛染明王不動の三十六童子。勸請申し奉る。四夷八蠻のあら戎。蝦夷が千島も一同に。競起りて來るとも責るに方便を失はん。況や以て鎌倉勢何十萬騎寄するとも。地君の御運も大手の木戸も。さつと開て忠平が。駒の蹄にかけ散し對ふ敵を梨子割。胴切。車斬り。雲に氷に霜霰。はらりくはらりくはらりく。と追散さば。ヤレ憂世の慰み。フシ是なんめり。地忌詞合言葉。是軍令の一大事時の細作忍の者。心を付けて油斷すな。急に住する事なけれ。奎て怠るべからずと。晏平仲が辯を借り。かんばんすいが智を揮へば。諸卒一度に聲を上げ。天晴古今の名將と。譽立。勇立。得物々々を取持ちて。寄する敵を。キホヒ三重今やくと待居たり。さる程に鎌倉殿より寄手の勢。畠山を先手として。大將副將千葉上總。佐々木岡崎土肥鹽島。其外宗徒の諸大名。都合三十六萬餘騎。旗幟を天に翻へし和泉が城を十重廿重。取圍たる軍勢の太刀の光は玲々と。フシ氷を植たる如くなり。地見上る城の高櫓さも悠々と忠平は。見る目まばゆき緋緞の鎧の金物閃めき

て。さも花やかに美しき女に酌を取らせつゝ汲むや和泉の三郎は數十萬騎の軍勢を。蟻とも蝨とも思はぬは。フシ不敵にも亦恐しき。地寄手は之を見るよりも悪き敵の振舞かな。一刻に責落せと鉦を鳴らし太鼓を叩き。三度上げたる鯨波の聲。數千騎鉦を揃へつゝ。霞の如く射かくれば大門門いて楯の板。突立てゝ駈合せ。死生知ずの兵ども。親討たるれども。顧ず。主を殺して引返さず。追つて巻くつゝ入亂れ。火花を散して。三重、戦ひける。地城の上より之を見て。詞ヲ、健氣なり潔よし。いて忠平も貯へし。奥州鍛冶の錆矢をば。一矢振舞申さんと。三人張に十三束。指し詰引き詰め仇矢も無く表に進む軍兵の。眞向眉間内兜。鎧も楯もたまらばこそ。五六十騎射伏つゝ。盃引受ずつと干。フシ手鼓打つてぞ居たりける。同時に寄手の陣よりも屈竟の若男。ぬつかく歩み出て。物その數に候はねば誰とも御存じ候まじ。千葉の介が郎等に秋葉藤次鬼澄とて。鎌倉方の人々には手おらせらるゝ男なり。忠平殿の御精兵。驚入て候へども。太刀打の程覺束なし見參やつと呼ばれば。三郎莞爾と打笑ひ。優しの者の言ひ分やいて物見んと云ふ儘に。地槽より飛んで下り。太刀拔翳し切て出て。龍虎雌雄を爭ひてはつしと打ば請流し。裾を拂へばひらりと飛ぶ電光稲妻蝶鳥の。とぶさを立る如くにて。半時計り切合ひしは。目覺しかりける。三重有様なり。地敵も味方も軍を止め。あつばれ今日の見物と。拳を握り息を詰め。打守りたる其風情。フシ晴がましくぞ見えにける。地されども忠平手だれ者。透を見つけてすつと入り。思込んで打つ太刀に二つに別れ失てんげり。地弟の藤六跳り出て。勢かかつて拜打ち。さしつたりと飛退り暫が間あしらひしが。初太刀に眉間を切割れ。眼暗みてたちく。ひるむ處を疊みかけ敢なく首を打落し。切尖に貫きて。詞鬼とも神とも呼れたる。和泉の三郎忠平を。秋葉藤六鬼清が討取つたり。と呼はつて。入らんとしたる後より似せ者擱の藤六殿。忠平堅固て是に有り參りざふと云ふ聲に。地南無三寶と振返りかさにかゝつて討つ太刀を。ひらりと後へかけ廻り。弱腰すつばと切放されかしこへ轉び失にけり。詞畠山が郎等に仁科團藏春平。退すまじとて駈出る。忠平莞爾と打笑ひ。誠に秩父が家中には本田仁科と名も高き。よい相手

ござんなれ受て見よと。地云ふより早。はつし〜丁々。切先よりも火焔を出し。暫が間採合ひしが寄れ組ん尤と。互に打物からりと捨て。上になり又下になり二三度四五度跳合しが。遂に仁科を取つて伏せ。首を搦んとする處へ。詞郎等四五人忠平が。前後左右に取付を。シヤ見苦しき奴原と。兩手を廣げ引寄て。地裁合際の下よりも。指副抜いて艸摺を。疊あげて三刀刺し。弱る所を跳返し其儘首を搦落し。目より高く指上て。詞又名乗のも古けれど。是こそ實正明白の。和泉の三郎忠平を。仁科國藏討たりといかつがましく呼ばりけり。忠平櫓に立上り性慾も無き鎌倉勢。切れば切る程跡よりも湧いて泉の三郎を。汝等如きあら凡夫討取つたるとは緩意と。地大聲上げて嘲られ寄手は大に腹を立て。諸方の軍勢一手になり。苛つて攻る人馬の聲。上は三十三天より。下は金輪發落へも。フシ聞えつべうこそ見えにけれ。地斯る處に權の頭兼房は。裸背馬に打乗て。逸散に駈來り。詞後白河の法皇より頼朝義經御兄弟御和睦有るべき旨勅使は黃門定家卿。三浦崎迄御着なり。互に矢を伏せ干戈を止め。此陣ひけやと呼はれば。地城外城内一同に。悦の聲笑の聲。弓は袋に籠は鞘。俄に鋤鉞斧鉞。亂杭茂逆木竹束より。燒柴艸柴白洲まで。打ち込み〜時の間に。水堀止る衣川。干涸となれば武士の立つかひも無き和泉が城。義經が御連は入日影。頼朝は御吉左右萬歳〜萬々歳。盡きせぬ御代の例成るわと後にぞ。思ひ合せける。

第三

武士の勇む勢。武隈の。松平かに治りて連なる枝のなか〜に。變らぬ御代こそ目出度けれ。地右大將頼朝公。忘れず山に御とう座あり。秩父北條和山上總岡崎土屋佐々木の一黨。其外軍勢百萬餘騎鎧の金具光せて。薙々蕩々たる其中に君が齡も長羽織。日本國を膝元へ引括りたる置頭巾。薄茶茶碗に染付の。フシ詩を語しておはします。地昌山の重忠御側にさし寄つて。詞御連枝の御和睦。滞なく相調ひ。四海靜謐致せし事。偏に我が君御威勢の普きがなす處。併

しながら昨日今日事治りし戰場に。如何なる野心の者有りて流矢反矢に紛らかし。地遠矢の狼藉測り難し御物の具をもあそばさず。輕々數御容體安きに居て危を。忘れぬといふ本文を御失念ばし候かと。諫め申せば御大將悠然として宣ふ様。調軍忠其方程にもない鹿相な事を言ふものかな。賴朝が五體は。仁義五常を甲とし。天地四方の胴丸に諸大名は金物。前後にひつしと鎧立て歩行武者若黨仲間等は。地草摺賴當小手脚當日本國の人民等を。小櫻織おどしたる我が一領の大鎧。不斷着用のからは野伏なんどのへろへろ矢。雨の如くに射かくるとも。何條事の有るべきと。嘯きたまふ御顔色天性備る大將の。寛仁大度の器量やと。フシ上下さどめき感じける。地然る所へ。高館より御使者有りて末々から。呼はりつげば諸大名威儀を繕ひ軍勢は。左右にはしつて立別れすはと言ふな一番に。我討取んと待ちかくる。地誠に暗の使者男。器量骨格世の中に。又と二人は長門櫓。透とほる程色白な。御物あがりの角前髪。色と武道の二側目。見るやうて又見ぬ様で綺麗星兜並居たる。軍勢共は塵埃。微塵恐れず憚らず。のつし熨斗目に麻上下。フシひだためつけて歩みくる。地海野の七郎屹度見て若懷劍もやいぶかしと。つかくと立寄て。調龜井殿にはさりとては聞しにまさる御若衆。地ちよつと肌への御情。お救しあれと戯れて懷へ手を差入る六郎莞爾と打笑ひ。詞拙者はずんと通り者さあ帯解て寢給へと。地四五間ばかり投げつくれば。興醒顔に起上り。はて扱。痛い痴話事と。フシ腰を擦りて入にける。地ぞ知ぬ顔して軍清は御前に畏り。詞御連枝互に今日より。御別心なき御固め。主君の誓紙は先達て貴命の御使者千葉殿へ。相渡し申さるゝ。賴朝公の御一紙を。頂戴致し歸れと有る。主人義經仰を請け。地龜井の六郎重清め推參致し候と。フシ口上迄も立派なり。地大將御機嫌麗しく。云ふにや及ぶ重清。兄敬まふ志義經今より忘れずば。賴朝いかで弟を惡む心のかはらぬと。地御硯を引寄られ。神文細々書流し。御指添を小指に當て。稍嚮して宣ふは。詞四十は老の初とは誰誠よりいひ置けん。血も枯たるか最前より突どもく出さるが。如何はせんと御誕あり。重清少し顔を上。君には御存じ有る事を。申すも恐多けれど。抑起請の始りは神代の

昔素義鳴尊。お心改り天照御神はらからの。御中和睦なされし時。戴たまへる。五百箇御統を乞請け。天の眞名井にて振りすゝき嚙みくだき。吹出る小霧とは願に出る血汐なり。之を起請の起りとして中古末代今日迄。大臣公卿僧官より君傾城の二世三世。地熊野の牛王に血をけがし。假の一夜の私語。誓文くされの言分も。犬打童子の約束に。指切髪切致す迄神國の風儀にて。殊更神は正直の首に宿ると候へば。とても事の事に。頂の。御血を染めさせ給はれと。フシ憚り。もなく訴ふる。地賴朝殆ど感涙有り。あれ聞き給へ方々。未だ廿歳に足たらぬ。若年者の分として。賴朝に差向ひ。所存の程を眞直に。言散したる不敵さは天晴武士や侍や。詞にめてて其方が。望に任せ得さすぞと。御眉合の血を點じ。御心靜に認られ。指出し給へば差寄て。二三度見返し押戴き錦の袋取出し。しつかと納て首に掛け。押退て一禮し。詞主人待兼申すべし。御暇下し賜れと。地諸大名にも會釋して。立歸らんとする所を。大將しばしと仰せられ。詞早速ながら其方に。某一つの頼がある。是なる小姓大助は和泉の三郎忠平が寵愛の一子なり。邊土に住ば諸藝迄無骨に育ち候ま。諸大名の付合をも見習ふ爲に賴朝へ。暫く預け置度き旨文覺坊が言次にて。此春よりも召使ふ。然に今度騒動の。きざしが見ゆると其儘に。急に使を差越して。理不盡に暇を乞ふ。某が返答に。父子の間も敵味方。相別るもの有ならひ。成ぬと言つて追返した。其時重て忠平より一生親子の縁切と大助方へ不通狀。賴朝も亦言ひ掛り猶々打捨置きたりしが。地最早世上も治まりて。上下祝ひ樂むに。大助一人心底に憂ひ歎かん不便さに。暇をくれんと思へども聞ば和泉の三郎は。殊の外の意地張者今と成りては此方から展すというても請取まい。親子の縁を切らすは政道に私あり。賴と云ふは爰の事。器量と言ひ又發明者。地龜井が弟と名告せてもさのみ恥辱も取るまいが。うけ取つて歸るなら。本望たらんと宣へば。詞清重御顔打守り。ア、道理かなく。地諸國の大名小名が。從ひ離く大將の。智計の程は凡俗の測知るゝ事ならず。御暇だに遣されば。成程召連歸らんと。領承すれば賴朝公。御嬉し顔に是や大助。主従の縁切た本國に立歸れ。今日迄仕へし恩賞に。よい兄分の持すぞと。

増たふ戯たふも有あ難がたくはつとばかりに手を合せ。名残惜なごしさと嬉うれしさと。二つの涙目なみに持ちて。御前ごぜんの罷立ふりたちちたれば。龜かめ井いも跡あとにひつ添そうて。使者ししやの首尾しゆび好よし土産みやげ好よし。追開おひいたる兄弟けい弟てい。若衆わかしゅの櫻念おうねん者の梅うめ。百萬ひやくまん餘騎よきが口に酢すを溜ためて。つれ／＼。三重詠みよめやる。フシ實じゆにや高たかきも賤しんしきも。世界せかいは濡ぬの晝遊ひるあそび。續三番双六つづきさんそうろうの。勝かちは乞目こめの義經公ぎけいこう。負けるも時の京きやうの君きみ。戀こひのゆきたけ差向さむかひ。痴話ちわや格氣りきのそば杖づゑに。私等わしらもいつか青柳あやなが。フシ心に思おもひ詞ことばにも。地和泉ぢいづみの三郎忠平さんろうちゅうへいは。御前ごぜんへあぐる大島臺おほしまだい。妻つまの花卷はなまき長柄ながえを持ち。疊たたみざはりもかたづまる。例れいの引言ひきご自慢じまんにて。形かたちを憤ふみ手てを拱こまねき。詩經しきやうの角弓かくきうの篇へんに。是兄弟こゝにけいによければ絆々きんきんとして豐とよなること有り。兄弟けいによらざれば交こやましき事ことを相成あひなりと。古語こごに。僞いつはり候こうはず殿とののお心こころ休やすれば。地家中ぢやうちやうは勿論もちろん國中くにちゆうの。端々はしはしも賑にぎ々々敷敷。空そらの氣色きしきも鳥とりの音おとも。まだ多おほながら春はるめきて十八公じゅうはちこうの若緑わかくろ。千鶴せんかく萬龜まんかめの御行末ごぎやうまつハ。お目出度めでたう存ぞんじます。義經ぎけい威義ゐぎを撞つつくろひ。兄弟けい干戈かんかを止とどめるも。其方そのほうが忠勤故ちゆうきんこ。取分とりわけて又行末またぎやうまつを。祝いふ心の臺たいの物もの。夫婦ふうふが切せつなる志し何なにを以もつてか報はうずべき。幸さいひ是これなる屏風繪びやうぶえは。古千枝こせんしの常則じやうそくが。諸國しよこくの名所めいしよを見みる如ごとく心をこめて書寫かきうつし。地延喜ぢえんぎの帝みかどに奉たてまつり。夜よるのおとどに立たられしが。後白河ごしろはの御時ごときに。平大納言へいだいなごんに下くだされて。義經ぎけいが手てに渡わたりしなり。詞花卷しはまきが慰なぐさに。譲ゆづり與あたふと宣のたまへば。地女房ぢによう悦よろこび立たち寄よて。又類またいなき御秘藏ごひざうを。我が身みに下くだし賜たまふ事こと。有あ難がたいとも嬉うれしいとも。申こゝろす詞ことばも候こうはず。あづまの果はに住馴すまなて。外またへ參まゐつた事ことはなし。歌學かがくの道みちは皆目かいつくなり。名所めいしよとも舊跡きうせきとも。猫ねこに小判こはんの樣やうな物姫ひめ君きみ樣やうは常々つねづねに。お心こころざしが深ふかければ。とてももの事に名所めいしよを。御道ごみちしるべと願ねがふのも。フシア、慮外りぐわいなと云いひければ。地京ぢきやうの君打きみうち笑わらみて。自みづかとても委くはくは。辨わきまへ知るに有あらねども。さあらば案内あんない申まうさんと。扇あふぎをととりて立たちあり。オクリ語かたりいたまふぞ面白おもしろき。

屏風八景

先づひながしの屏風びやうぶには。面白おもしろや花はなの都みやこの初春はつはるや音羽おとのはの山やまの。薄霞うすがすみ。今日けふ立初たちはつし年波としなみの。賀茂かみの川風かわふう長閑ながかんにて氷解ひようかい

け行く清瀧や。谷の戸出る鶯の。聲や高尾に聞ゆらん。スエテ鳥羽田の面の未續く。淀野の澤のまこも艸。芽含わたる折しもは。フシ美豆の御牧の。放れ駒。地實に音に聞く津の國の。難波の浦の春風に。スエテ高師の濱や住吉の松の。緑も一入に。咲きてかゝれる藤波は夏のていかと打見えて。雲井の餘所の時鳥。フシ高間の山を過ぎぬらん。フシ龍田の川の卵の花や。十市の里の夏衣。かけてや曝すさは川の岸の柳の。下納涼。いつの間にかは神風の伊勢の濱打戦ぎ。今こそ秋に近江路や。スエテ冴えゆく月の鏡山。光を磨く水海の。波や氷と見えぬらん。荒てやさしき不破の關。スエテ旅行く人の立別れ。稻葉の山や。宮地山。峯の。紅葉の色々は。フシ誰かは染めし。唐衣。二むら山の村時雨濡れてさわたる雁がねの。落つる平沙は。渺々と汐の干澁の入海に。濱名の橋は跡絶て。ツキオクリ小夜のへ中山。是かとよ。フシ打越見れば大堰川。漲る水の浪枕。早くも爰に清見瀉。關の戸さゝぬ君が代の。久しかるべき例には。地千本の松こそ目出度けれ。富士の高根の白妙に。積れる雪を見るからに。フシ冬の氣色は面白や。伊豆の三島の宮立も。臨幾世經ぬらん神さびて。鎌倉山の星月夜。大磯小磯こゆるぎの。沖に釣する。フシ蛭小舟。漕がれて歸る夕暮は。遠浦の歸帆はならん。秋の千種のいつとなく多枯果てて武藏野の。はこの池水氷川。なうくあれく見たまへ。鴈鴛鴦都鳥。群居て遊ぶ。粧は筆の限りや盡すらん。地扱又こなたは上總の。香取の浦にておはします爰は上總の枝の濱。フシ常陸に鹿島の御社や。ふりさけ見れば筑波根の。地峯より落つる水無の川。未だ春には有らねども波に花さく櫻川彼の貰之の言の葉に。かけし昔の倂も。實に理と陸奥の。フシちかのへ鹽竈松島や。フシ小島の海士の。苦屋形。地吹荒したる浦風はそとの濱にや通ふらん。末の松山衣川。阿古屋の。松の木の間より沖に見えたる津輕が島。千鳥友呼ぶ袖島や。蝦夷が千島の有様迄残るかたなき筆のあと。地よくく覺え候へと。教へ給へば夫婦の人惑。喜び興じける。

地斯る所へ龜井の六郎重清は。君待遠に有るべきと足を早めて歩みくる。跡に續ける大助は久しうぶりて二親の。顔

を遙に打守り御懷しさも床しさも。包めど胸に縋ひていそ／＼したる取形も。俄に濕る。俄も我が子と知れど父親が。見ぬ振すれば花巻も顔を伏屋の簾木を。フシ身の上に知るばかりなり。地義經龜井を御覽じて。詞フ、堅固にて戻つたな。シテ頼朝の神勢は如何様な有様ぞ。諸大名は誰々が左右には相詰し語れ聞んと御説有。六郎詞を押鎮め。御兄弟とは言ひながら御果報の違し事。譬へて申さば築山と富士を見上る如くにて。地四方八里が其の間に必死と並ぶ軍勢の。鎧の光は秋の野に咲亂れたる女郎花。石崇が金谷園項羽が威勢を振ひたる。鴻門の會とてもよも是程には有るまじと。いか様ぎよつと致せしが元來某御館を。調出るよりしていかな事生きては二度歸るまじ。軍勢如何程あらば有れ頼朝公と拙者めが間十間有るならば飛びかゝつて指還へ。今度の鬱憤晴さんと存じ極めて参りしが。地推量とは格別にて御前表は打和ぎ。御用心有る體も無く黒羽二重のお小袖に。御道服を打ちかけられ。御側へずつと召れつゝ。御親切なる事どもを暫し相談遊して。御心よく神文を御認め候と。フシ錦の袋差上ぐれば。地義經益御悦喜有り汝が今日の功名は。蘭相如が秦に行き晏子が齊に使せし。武勇にいかで劣るべき恩賞乞によるべしと。自筆に御判すゑられて扇に取添へ賜はれば。六郎はつとにじり寄り冥加に餘る仕合と。二三度四五度押戴き。御前に差置て首を俯せて申す様。詞人の義む感狀を辭退申すは何とやら。をこがましく候へども。感狀褒美と申す儀は外様の武士が事により。主人の手前を浪人し他國の奉公望む時。感狀書が候の褒美に預り候のと。言立にする爲には究竟一の御恩賞。此龜井は一生に外の主人を頼んとは。地ゆめ／＼存じ候はず用に立てねば大切な。感狀とつても反古同然御返じ致候と。忠義の詞底深き心の水の重清と。フシ各あつと感じ合ふ。地中にも忠平横手を打。詞ハ、てかされたてかされた。力を盡し勞をつくし其報を望すとは貴殿の事。適今の一言は武士の教になる詞。地板にも刻み石にも彫り是は龜井が金言と。末世に名をば止めたいと賞敷すれば重清。詞ハ、／＼殊の外なる御褒美に却つて當惑仕る。就いては御子息大助事主従の縁切つて。某伴ひ立歸つた勘當赦して遣されい。ハア異な事を仰らる。大助といふ世怪

をば忠平は持ませぬ。されば貴殿の片意地は鎌倉殿も御存じ故。拙者めに預けるとひたすらお頼み有つての事。地にひらにひらにと言ひけれど。返答もせず見向もせず子にも色にも迷はざる。フシ忠義一圖の男なり。地斯る折とや青柳は。壁訴訟なる獨言。餘所にはあんな頼もしい人が跡から出て来るに。此身は何と成うぞと尻目遣へば京の君。打頼いて義經の。袖をひかへて宣ふは。あの六郎と青柳とは疾うからくさり合つた中。忍びくく契るのは氣苦勞さうな物じやのに。めをとにしたらよからうと。おづくちよつと言つて見る。うけは中々義經公。夫島臺とお詞の。オクリ變らぬ。丙と姫君はつい飲みそめて青柳にさすがはよめり心にて。思はゆさうな顔付が。フシ千代の結や萬世の。地龜井に廻る。盃を大助其儘走り寄り取つて微塵に打碎き。詞ナウ曲もない龜井殿。まだ兄弟の盃さへ致さぬ内に女房わざ。地あた見苦しいやらしと。顔に散せる霜葉は。二月の花より照増さる。地青柳むつとせき上げて。詞是そこな性惡。巧やつたのく。若衆嫌ひは知て居る。どこぞの女と馴合つてこんな時にはこうせいと。あの子に頼んでさせたのぢや。地夫程いやな青柳に。やうむ様にはなせしやつた。まどやる物が。盃を飲んでこなたへ戻しやるか。どうじや。くつと縄り付きてぞ泣叫ぶ。地六郎聲を和けて。尤々さりながら。心を鎮て重清が。言譯聞いて了簡せい。詞賴朝公のお心に此大助を國元へ。戻したいとは思せども。親忠平が請取らねば恥辱をお取りなさるゝ故。龜井を頼む弟にせい大助によい兄分を。肝煎などとの御詞。百萬餘騎の軍勢が耳を寄せて聞いて居る。すれや某は今日より日本一の衆道ずき。地何程そなたが可愛うても。賴朝公への聞えも有り。大助まへぶり有る内は此盃は致さぬと。詞を放てば義經公甚だ立腹ましく。て。詞ヤア何と言ふ六郎。兄賴朝が挨拶で汝に弟を持すれば。義經夫婦が仲人て其方に妻を遣る。孰の命を重ずるサア返答を聞かせいと。地あらゝか成りし御辭に忠平慌てて走出て。詞御尤もく。先づ御鎮り成れませ。コレ龜井殿。出来ませぬ。殿より外に主人をば求めぬこなたの心底で。賴朝公への義理立も日本國の大名が。笑ひ誇りも構はぬ事。手前の一分立ん立派な事のため程。最前の金言が泥の中へ埋

るゝが。地夫でも合點が行ぬかと。諫の詞是非も無く。誤入て候と。頭を下ぐれば義經も。忽ち御氣色直りつゝ。さ有ば奥にて祝言の。盃改ため致さすべし。皆々こなたへこなたへと。オクリ打連へ御殿に入りたまふ。フシ跡には母と。大助と哀れ果たる顔付にて。そばへも寄す物言す。フシさし俯いて居たりしが。地暫く有りて大助は遽り傍りを見回して。申し母様是申し。母様なう是母様と。呼べと花卷答へねば向ふへじつと立回り。詞なせにお詞下されぬ。花卷顔を打背け。忠平殿はお主へ義理と。自は又夫へ義理。地父が勘當したる子に。母と云るゝ名は無いと。ずんと云れて途方無く。元の處に立戻り。恨めしげなる聲を上げ。親の不興は赦されず。龜井殿には見放さるゝ。アア是非も無き身の上と。地袴の上を後へはね。押肌脱ぐを尻目に見て。詞大助それは何するぞ。人そばへなら見苦しい。ア、曲もない事言はしやんす。若輩なれど私も鎌倉殿の御家來ぢや。ア、頼朝の家來ならなせ鎌倉へ立歸らぬ。イヤく往んでは大助が一分が立ちませぬ。千年万年奉公も。只一日の宮仕も。主といふ名は同じ事義經公のお詞は。六郎殿が立て給ふ頼朝公のお詞を。水に成したる私がどふまあ生きて居られましょ。詞お前は他人で候へども介錯して給はれと。思入つたる氣色を見て。地母は覺えず走り寄り。ヲ、健氣な者の心やな。お主の義理に死ぬるとも。其義理はつた詞さへ生寫しなる親と子の。取替もなき獨子を親の不興もお主への義理と思へば是非も無し。忠義の爲に勘當し忠義の爲に死ぬるのを。逃走れども得止めぬ。フシ此身の義理こそ悲しけれ。地町人の子に生れたら父が勘當したりとも。母が影身に立隠しかくまふ術も有るべきに。和泉の三郎忠平が妻と呼ばれて片時も。男の目をば暗まして宿には足は止さゝれず。鎌倉殿へはいなされず天地の内に居所は。無き身の上と覺悟して。潔よう腹を切れや。おまへは他人となぜ言つた。誠の母ぢや母親が介錯して得させうと。地帶引しめて片肌脱ぎ。掛けたる刀拔持ちて。後へ頓て立廻り。心靜に死ねくくと。詞は清く心には。地世間の親は我が子をば。萬々年と祈のに。首を討んと立廻る。此身は鬼か氣違ひかと。胸へもてくる涙をば。撫ておろし。フシ打守るこそせつなけれ。大助少も惡

びれず。詞私が死ぬるは定り事かんまへておば様の。さがない故で有つたとて中惡うして下さんすな。ヲ、優しい事をよう云うた何しに人を怨めうぞ今日爰へ死に來る。過去の業ちやと思つて居る。地此世の因果は是非もなし未來大事ちや西向いて。彌陀如來を頼みましや。詞イヤ／＼念佛申しても親の勘當請た身が。何の佛に成りませう。牛とも馬とも成り替り御奉公致しましよ。やれいま／＼しい事云ふな。地誤もない其方に勘當は表向。親子の縁は變らぬぞ。爺親とても我とても。やんがて冥途へ死んで行く極樂へ往て待つて居や。詞そんなら嬉しうござんする。心がすつきり晴れました。南無阿彌陀佛彌陀佛と。地十遍計り唱つゝ。脇指逆手に取直し。乳の下にさし寄れば。母は後に力を付け。詞でかしたずつと引回せ。せくな後れな。地又引けと。右へ廻るを相圖にて。甲斐々々しくも介錯し。オクリ上着を脱いで打復ひ。地邊ののりを押拭ひ。元の所に押直り。泣かぬ顔する目の内は。フシ武士恥かしき女なり。地龜井青柳兩人は。とさん盃持出て。詞大助どれへ參られた。兄弟分の杯が致したう存じます。ハア忝うござんすが。心地悪しうて先程から寢轉うて居りますが。重ての義に遊しませ。姉さま夫は私への御遠慮でござんしよ。最前の首尾成る故義經様のお前にて盃はしたれども。大助殿と兄弟の契約濟ぬ其内は。本の夫婦ぢやないと有る夫での事でござんする。フ、すりやお二人の相談ぢやの。地成程そんなら逢はさうと。小袖まくれれば紅の中に臥たる顔形。龜井ははつと聲を上げ大助扱は腹切つたり。早まつたりし若者と。狼狽れば青柳も。ともに取りつき抱きつき。最愛の人の心やな。お主に放れ二親の。不興は赦りずせてもの。頼に思ふ龜井殿聞えぬ仕方と一筋な。雅心にした事を。跡先なしにさがなくも云散したる恥かしや。赦して下され甥の殿。こらへてたもや大助と。フシ口説に甲斐も涙なり。詞六郎は小聲になり。大助を死せては片時も跡に残られぬ。そなたは何と思つて居る。私も生ては居りませぬ。地ヲ、其管ぢやと言ふより早。刺違ふとする所を。忠平奥より走出て。六郎を抱留れば。妻は青柳引分る六郎は泣喚き。詞死せて下され忠平殿。大助を死せてはこなた夫婦へ立ちませぬ。地慈悲ぢや死せて死せ

て死しなせてと。振放ふりはなす手をしつかと取り。詞ことばこりや狼狽うろたひ者。行方ゆくへも知ぬ大助が死だと言いうて某それへ。立ぬと云ふは何事なにことぞ。急いそかずとつくと分別ぶんべつせい。何者なんものの子か知ねども未十二や十三で。お主おぬしの詞ことばを水に成し一分か立たぬとて腹を切つたは健氣けんき者。夫それこそ武士しやうしの性根しやうこんなれ。私事わたくしごとに双物ふたものをばちるばはするは匹夫ひつふのわざ。あた見苦みぐるしい取措とりさくやれ。いやさ忠平ちゆうへい。御意ごいを守つて青柳あやなと夫婦ふうふの盃相濟さうさいんだ。是これからは又大助へ。義理ぎりを立つるが誤あやまりか。ア、暗い／＼主人しやうじんの仰おほしめは。青柳あやなと夫婦ふうふと成れと宣のたまうたり刺違さしちがへとのお詞ことばか。未來こゝろで添そはうなどとは君傾城きみけいせいのばさら事こと。お主おぬしの詞ことばは反古ほんこに成る夫それでも義理ぎりを立てたるか。忠平ちゆうへいが恩榮おんえいには頼朝公よりともこうの詞ことばも立つ。元來主君もとよりしやうくんの詞ことばも立つ其方達そのかたたちが義理ぎりも濟すみ忠平夫婦ちゆうへいふうふも満足まんじくする。裁さいを黙だまつて見て居ゐよと。地言詰ぢごひめられて兩人ふたりは。死しるにも又死またしれぬ義理ぎり。生なまてはどうも居ゐられぬ義理ぎり。待冥利まちりに盡つくきたかと。足摺あしずりしてこそ居ゐたりけり。地忠平ぢちゆうへいとつくと坐すに直り。詞ことばこりややい青柳あやな爰こゝへ來い。姉は我が子を殺してさへ泣なきたい顔かほを押隠おしかくすに夫それはどうした未練ふれんな事。龜井殿かめいどのと大助だすけが兄弟分きやうだいぶんの盃さきを其方そのかた立つて酌しやくをせい。サア龜井殿かめいどのの方かたへおさし成なされと言いひければ。地あつと答こたへて盃さきに涙半なみはん分ぶん干兼しかねて。しやくりあぐるや酌人しやくにんは。顔かほを袂たもとにさし入れて。現心うつこころも有あはこそ。死骸しかいの傍そばに指置さしおいて。フシかしこへどうと臥轉ふうつろぶ。詞忠平しちゆうへいは驛きやくを上げ。大助定めて嬉うれしかる。頼朝公よりともこうの詞ことばを立ち。おぬしも大死おほしせぬからは。忠平夫婦ちゆうへいふうふも満足まんじくな。地今日けふよりしては青柳あやなを汝なんぢと思うて朝夕あすけに見て慰なぐさめ六郎むさむらも。念頃ねんころにして給たまはれと。さしもに剛がうの忠平ちゆうへいも。フシ忍泣しのびなくこそ道理ことわりなれ。地花卷はなまきはにじり寄り死骸しかいを膝ひざに抱いだき上あひ。双ふたを腹はらに立つる迄御勘當ごかんだうを氣きにかけた。詞魂たまひはまだ家やの内にうろ／＼として居るで有る。耳有みみありらば聞きや目有めありらば見や。あれ爺おやさまは泣なかしやるぞや。親子おやこの縁ゆかりが切きれぬ故驛こみを立てて泣なしやるぞよ。地母は偽いつはり云いひはせぬ。ナウ忠平殿ちゆうへいどの。大助が潔いさぎよい死し顔しやう見て我が子こと。地一言云いっぴんぐんうて遣やらしやれい。一世一度いっせいちどの花卷はなまきが無心むしんでござる我が夫つまと。フシ手を合あせてぞ振口ふくち説とくく。詞忠平死骸しちゆうへいしかいに打向うちむかひ。何様なんさま今日歸けふかへるのは親子おやこの對面たいめんしよう物ものと。思おもうた當あたが違ちがうた故無得心むじくしんなる忠平と。嘸あやや恨うらんで死しんだで有る。死人しにんに甲斐かひ無なき云譯いひわけを一通り語かたるべし。御兄弟ごけいだいの和陸わづ

の事人は目出たう思へども某は心得ず憚りなれど我が君に頼朝公のお詞を用ひぬと有るお心が。つぐが破れの起りにて。是より萬事萬端の。威勢争ひ出来せん。頼朝公の御所存も退いて案ずるに。今日我が子大助を國へ戻してより／＼に。此忠平をお味方へ招きよせん謀。遠くも有らず御兄弟。御中再び不和に成り。一戦起らん其時節和泉の三郎忠平は。頼朝公に縁有りと諸軍勢に言はれては。地是迄成せる忠節が。やみ／＼となる無念さに。武命に汝を捨たる故顔さへろくに見ざる事。残念なりさりながら。妻なればこそ子なればこそ。討ちも討つたよ。潔よう。腹をも切つて死んだ故。嬉しい親子の對面する。邪見なども酷いとも。恨んで呉れるな大助よ。女房言譯して呉れい。そなたはようも泣かぬぞと。言ふを涙の満汐に堤も切て花卷はわつと泣出す。其聲は。フシ松風騒ぐ如くなり。地稍有つて忠平は。亂る心取直し。フシア、迷うたり／＼。今日は和睦の御壽。歎を止めて笑ひ顔。龜井夫婦は奥へ往きや。我等は法の營と。空しき骸を掻き抱き。泣々館を立出て。歸るは野邊の夕烟残るは闇の空炷や。煩惱の火に恩愛の。歎を積て取りくべて。無常にも泣く戀にも泣く。袂の時雨袖の雨空に知れぬ五月空やと皆人哀を催ふせり。

第四

地匡正の忠阿順の徒良將之を察すとかや。源九郎義經公騎ます／＼超過して。國民愁へ歎くよし。鎌倉殿へ洩聞え。二度御中不和に成り。急ぎ追討有るべしと。文治五年の夏の天晝の月夜の卯の花絨。畠山重忠は諸軍に一日先達つて。逆柴山を屯とし。手勢をすぐつて三萬餘騎中に股肱と頼まれたる。本田小五郎近富。仁科園藏春平。廣瀬藤内兄弟を。フシ膝本近く招き寄せ。地軍配圍おつとり延べ高聲に宣ふ様。詞抑高館の城廓は日本無双の要害。軍將には和泉の三郎古今獨歩の勇士故。敵に九分の強み有るなれども人の和を言へば。日本國の軍勢が頼朝公の徳風に。地艸の靡くが如くにて。義は泰山より重くして命は鷲毛に猶輕く。亂杭逆茂木引破りぼつかげぼつ詰め打寄せば。忠平一

人龍木の隠形の術働くとも。纔か五日か三日に責め亡すは知れた事。偶然に重忠去年の冬和泉が城の先陣にて。多くの味方を討すといひ。大將を討滅せし事世の人口も口惜く。地今度に於ては此手にて是非忠平を討ん爲め。又々先陣乞ひうけし。四人の内に一人は。軍の勝負を願す。只一筋に狙寄り。引組で討つて取り我が鬱憤の散ぜよと。フシ理立て、云ひければ。地本田の小五郎つゝと出で。調御説の趣近富めが。胸にどつかと納候ふ。誰彼といふ迄無く明日中に忠平が。首揃切つて見参に。入れ参せんと答へれば。三人の者聲々にイヤ存外な事を言ふ。見た事も無い初陣に高名だては無用なこと。土産に入るならちちらが軍の跡に這回り。拾首して間に合せ。ホ、成程をちとがいふ通り。今度軍の寺入するいろはに本田小五郎は。地似物かぶる鍛錬は。いかさまあひもせぬ京と。フシ天窓を叩いて打笑ふ。詞仁科大きに腹を立て推参なり近富。似物かぶるか正眞の汝が首を捻切るか。地勝負せんと立上る。シヤしやら臭い顯骨。打碎かんと飛びかゝるを。廣瀬兄弟取付きて。こりや味方討何事と。フシ漸抑へ鎮めけり。詞重忠打笑ひヲ、頼もしい。地某指圖致さんと。地矢立の筆を取り出し。文字を書いてひん圓め。一二三四の揉圖に前後は天に任すべし。方々開けとのたまへば。地武士の本懐此度と。面々心に信を取り。南無八幡大菩薩本田が一を取つたぞと。踊上つて悦べば。三人は又關取の。オクリ負けて片屋へ入る如し。フシかゝる所へ。地佐々木の三郎盛綱と案内させて入来る。跡に引かせし囚人の身には三衣を着しつゝ。月代青く大たぶさ。狼狽廻る頼付を。都の茶筌鉢叩。瓢箪出たる駒よりも。フシ珍しうこそ見えにけれ。調盛綱秩父に對面し。去年と申し當年も先陣と言ひ取分て忠平と御對陣雌雄の譽と存ずれば。御羨しく候なり。就いて今朝隣陣江間の小太郎國より。法師一人忍出る。陣所へ出家の往來は珍しからず候へども。隠れ廻るが怪しさに。搦めて詮議仕れば。頭巾の下はあの通り。其上お聞き遊され。城方へ内通の書簡を持つて居りました。御覽あれとて差出す。重忠披いて讀みあぐれば。明後卯の刻合戦の節兼約相違有るべからず。且又一味の輩は。何れも甲の忍の緒を切らせ置き候まゝ。御味方の軍勢とも。必ず見損じ

なき様に。御下知最肝要なり以上。高館の城内へ御存の何某より。地重忠暫く思案シシテ何者の家來とも白狀は致さぬか。然ば不敵な所存な奴。どう質問ふも云ひませぬ。ム、さうござろ。ヤイをこな横道者。まだ是ばかりで有るまい。外にも有らう白狀せい。彼の男打笑ひ。女童の諺に。四相を悟る重忠と。言ひ難すれば誠かと付けあがりした當推量。狀より外に何にもない。出さぬと有つて重忠が其儘に置くべきか。小五郎團藏立寄りて衣類の襟を解いて見よ。地承ると走寄り。上着下着を引裂いて。小帳一冊取出す秩父堯爾と打笑ひ。詞成程かう有る筈の事。サア佐佐木殿ごらうじませ。何ぢや毎日聞書帳。一つ弓の重藤眞州行。矢の地の大小太刀の品。公家に二品武家の太刀馬の毛色は五種五色。一つ正月十六日樓の普請成就にて働勢二千五百人。外の出張へ六百人。一ツ三月三日式例は例年に相變らず。一つ。五日の夜に入て佐々木の三郎盛綱より。味方へ一味内通の献上物三種。文箱一つ到來といと細かに記しける。地盛綱はつと赤面し大小拔て重忠が膝元に差置ば。調ハア佐々木殿何なさるゝ。されば只今囚人が訴人の實否立迄は盛綱とても科人よ。腰の物をば預けます。對決仰付られれば満足に存じましょ。秩父から／＼と打笑ひ。弓矢取つては日本に勝る者無き佐々木殿。智謀は次にござるよの。コレヤ敵より謀。今度寄手の中にも。こなたを第一敵方に恐ろしう思ふ故。城へ内通有るなどと頼朝公に疑はせ。責口を引かせん爲。古へ陳兵張良が。范増を斥し例に倣ふ計ごと。これ反間と申す者。まつた甲の忍の緒を切つて軍に出る事。必ず忠義の輩がお主の爲に討死する。後の證據に致す事。虚實を知らぬ軍勢が迷へば味方の害に成る。本田は陣中駈廻り明日の出陣には。いづれも甲の忍の緒を切つて軍を致せよと。軍勢共へ云渡せ。囚人悪き奴なれど命を助くる立歸り。忠平にいふには。斯様な愚者の謀計重忠が黒眼を。開くに及ばずと慥にかなり男めは。地法體させて追拂へ。畏つたと夕顔の。智恵の墓はふ畠山。くはせて見ても參らねば。はて何とせう道性の坊。はつち／＼發明な。旦那殿様さま／＼と。聲も慄ひて。三重逃げて行く。地人間萬事寒翁が馬の足並行歸る。矢叫びの音聞の聲。天地も。崩るゝばかりなり。

地片岡の八郎は姫君のおはします。中門の戸に立寄り。大音聲で。同京の君へ申します今朝迄は敵味方牛角の軍に候しを。錦戸伊達の兄弟めが寄手へ加はり候故。外様の武士は猶以て残なく落失せて。城中の軍勢は二百騎ばかりに成り候。我君にも御最期の御酒宴只今眞最中。併しながら生害は同事と有るの御心。地追付け御左右有る迄は。必ず早まり給ふなと。フシ言捨ててこそ入りにけれ。フシ皆人の世に有るときは數ならで。憂にはもれぬ中々に。艸葉に置ける末の露。地元の雫と今ぞ知る。フシ命の限り京の君。地佛壇の間へ出て給へば。御供に参る女房達。先づ一番に佐藤の局。同く娘の花卷。妹の青柳。其外以上十三人。フシ今日を限りと白無垢に。こうがうの縁盡きず。知死期待間は朝顔の。フシ葉越しに咲ける如くなり。地京の君宣ふ様。日頃は主従一所ぞと。思ひ入つたるもののふも。皆落失せる世の中に。女心の一筋に。地死出の山路の郭公。鳴音を聞くに人々と。伴ひ行くこそ嬉しけれ。地三世を掛けて諸ともに。斯くこそ見まほしけれと。しほ／＼としておはします。地佐藤の局も打しはれ。げにや師走の月夜とも。すさめられたる老が身は。此世に心残らねど若木の花の人々を。一度に脆く吹嵐。御最愛やとばかりにて。娘の顔を打守る。フシ心の内こそ道理なれ。姉の花卷さし寄つて。愚の詞候や。されば古歌にも散ればこそ。いとゞ櫻はめてたけれ。浮世に何か久しかるべきと。フシ聞くものを。取分に我々は今別るれば今に又。御佛を三瀬川手に手を取つて渡る身の。何かは思ひの有るらんと。心強くは諫むれど。理知らぬ涙のみ。フシ膝に。散行白玉を。フシ貫きとめぬ。青柳は。思ひくゆらす袖香爐。焚きかはしたる我が夫は。軍に出給ふ度毎に。詞甲の下に亂髪。大刀鎧迄とめ伽羅の。地其佛はすがれ共。煙は夫の形見ぞと。フシ御前にさしおけば。京の君は取上て。ア、定なの世の中や。我一とせ仙洞の宴に召されし時。十種香又は花鳥香。小艸。宇治山香などは。世にきゝ馴て古めかし。源平香といふ物こそ。分けて其名も義經と。御戯に預かりしも。地いつしか今日は引きかへて昔語に成りしをや。身は慣はしの橋柴と。聞いて廻すも我々が。烟競べや。フシ身を焦す。フシ憂とつらさと。悲しさを。取集めたる身

ながらも。泣かぬを義理の笑顔とだえは頓て打しめる。愁を拂ふ筈もて飲めや歌へや樂めと。最期の酒宴。ぞ始りけり。フシ然る折ふし。地秀平の後家正貞尼。あわたゞしげに走來て。中門の戸をあらけなく。明よくと打敵く。地すは君よりのお使と。走りよりて押開き。是はと言うてはつたとさす。詞ヤアナウ嫁御心得ぬ。正貞と見て開きたる門をばなぜに立出す。ア、お聲が高うござります。ヲ、高くば低う物言。姫君様はどうなされた。早御最期が近づいて御酒宴なされてござります。お供の女中は十三人。お帳面もしまりました。お前の事は幸におつむりも圓ければ。他人の謗も侍らはじ。地お耳へ入らぬ其内に。お館へお歸りあり。姫君様や我々へも。香花手向て下されませ。詞正貞聲を荒らげて。すりや逃さうとて立出したり。地常々そちは夫程に。愚痴な者では無つたが。最期近くて血迷うたの。心を鎮てよう聞きや。詞母の爲に橋を渡すは不孝なり。父を殺して恥を忍ぶは孝行ぞや。地名をも義理をも顧ず。命救ふを孝行と。思ふは世間の嫁姑。五十四郡の大將。秀平殿の後家ぢやぞや。詞そなたの夫の忠平は何者の腹から出た。日本一の兵は正貞が生んだぞや。嫁御花巻返答しや。詞イエ。夫は立ちませぬ。そんならなぜに無道なる子を二人迄生ましやんしたム、錦戸伊達の兄弟が。敵に成つた云と事か。周公丹の聖人さへ。兄の無道を得しづめず。柳下惠が賢なるさへ弟の惡は得止とめぬ。天より受る氣質にて。古へ今も例有る事。地假令我が子は何十人。惡人も有れ無道もあれ。地正貞が氣を疑ふはお主一人が了簡か。佐藤の局がいひ付か。明けなば爰を破るかと。割れよ碎けと叩く。花巻なく。是申しお前の兼ねてのお志。よう知抜いて居ります者。私が何しに疑ひましようなりとしてお前をば。地お助け申さう爲ばかり。とに角お歸りあそばしませ。何事有つてもあけやしませぬ。詞不孝になるが通さぬか。夫でも聞く事ならぬ。破るが。いゝや。地あけくと外から叩く内から押す。忠孝二字の争ひを中戸一つの隔にて。互に。わつとぞ。泣出す。地佐藤の局堪へ兼ねて。すつと立寄り戸を開き。正貞尼を誘ひて。フシ御前にこそは。フシ出でたまふ。地姫君世にも嬉しげに。最前よりも數々の。様子は是にて聞きました

た。地冥途の同じ道連と。御盃をさし給へば。正貞尼三度押戴き。昨日にも一昨日にも駈参るべき私が。遅なはりたる言譯を老の末期の一曲に。地御物語り申すべし。今一つ召れよと。盃を扇のせ姫のお前にさし置て。膝立直し拍子をとる。

軍物語

舞フシ萬代と。名は高館の城郭も。卯月の空の初紅葉。詞日本國の諸大名。鎌倉殿の下知を受け。押しに。おして来る程に。舞地したかみ川の南より。くり駒山の峠迄。ナホス軍勢ひつしと。フシ居並んで。白旗中黒かしら黒。大旗小旗すその旗。國扇の旗は兒玉黨坂東の八平次。揉にもうて責めよする。味方小勢といひながら。武勇の聲隠れなき。龜井の六郎重清。片岡八郎常春。詞中にも和泉の三郎こそ。諸軍勢が目にかけて。組んでや打たん射てや落さんと。地物に騒がぬ秩父さへ。おとなげ無くも先陣を。望ませたりし忠平は末代迄の手柄ぢやもの。手ひどい軍を致せかし。能い方便をば出せかしと。フシ高き所に駈上り。地遠眼鏡をばひつそばめて。覗く程に。一昨日の卯の刻より。酉の刻迄いかなあからめせざりしが。親の一念届いてか。一昨日の戦は。城方が八分の勝。詞嬢しうて夜が寢られず。地明ると其儘遠眼鏡。一日詠めて居たりしが。六分の勝は致せども。精氣が弱つて見ゆるがと。思ふに違はず今朝は軍は牛角に成りし故。南無三味方が負に成る女なれども秀平が。寢覺の床で端々を聞覺えたる事も有り。いで忠平が加勢せん。弓よ太刀よと取急ぎ。鞍置馬に打乗りて早二三町駈出しに。詞ホウイ／＼ト呼掛る。何事なりと振返れば。照井が弟の七郎郎。大音聲にぬかす様。錦戸伊達の御兄弟。頼朝公へ味方と云ふ。ハアなむ三寶と思ふと早。地馬よりころりと轉落しを。手綱とらへて。漸と。よろばひ廻り這廻り。爰迄は来るよなう。ア、何とせう是非がない。詞我君の御運の盡。お歎き有るなお姫様。地女房達悔めやるな。驪山宮裏の海棠も。フシ馬塊の土に埋れ

ん。地王昭君が月の肩。胡國の岬の中に居る。西施が雪の膚さへ狐舟の水の哀世や。さう言ふ人も。死ぬれば。傳へ
し其身も又々死ぬる。りやうきが妻もりようが手かけも王陵孟子の母も死ぬれば。聶政豫讓が妹も死ぬる。釋迦も入
滅達磨も死るゝ傳教弘法法念親鸞。死で生れて。生れて死で。環のばんめぐるに似たり。電光石火の。フシ如くな
り。冥途の旅は先もなし。誠に人界は火宅の住家。誰か一人安からん。上に在つては下を憐し。害心の彌増に。終
には其身を亡すなり。有るに付きても愁ひ無に付きても悲み或は。戀の山路を分迷ひ。煩惱の土に身を賣められ。盡
す思ひの数々に。あい。く。く。く。／＼我と打てる火の車。一生は盡くるとも。望は盡きぬ浅ましさを。只何事
も夢ぞかし。迷ひの雲を打拂ひ。輪回の絆切りて。菩提の船に棹して。彼岸に至りく。て。コハリ成佛の玉座に連
り。盡ぬ榮花を極樂の玉の臺の樂ぞ。ナホス願へやねがへ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛。く。願以此功德平等施。
一切同發菩提心往生安樂國と。回向の聲も十四人。勇みくし有様は。忠有り義有り。情有りとみなか。申すばか
りは無かりけり。

第五

地蔵公が車の鶴も去李斯が繋ぎて樂しめる。大骨折つて高館や。伊達錦戸さへ氣を變じ。寄手の勢に加はれば況や諸國の寄武者共。或は落失せ降参し。纔か百騎か二百騎が。城を枕と一筋に思ひ入つたる梓弓。射ちがへる矢は夕立の軒端を過ぐる如くにて。實寄すれば追返し。追返されては責めかゝる。兩陣互に氣を振ひ。千騎は一騎に討ち成され。僅一陣殘るとも。フシ果つべき軍と見えたりけり。地片岡の八郎常春は。一の關の南口。多くの軍勢引請けて。切つて出でたる氣相も。黒糸絨の腹巻に今日の晴と靨流して。金銀のより糸に。漣打つたる節り總。裾金物はちらちらちら。ちらめき渡る太刀先に。ぼつかけはつ鐘振廻はる。地佐原の十郎義通が。魚鱗に構へ控へたる。陣中へ切つ

て入り。捲くり立て、難ぐ程に。陣場に足を溜め兼ねし。調爰に器量も秀づなる。日の丸の指物は。照井の七郎光直
 と名告も流石面伏。鬼神と聞えたる。片岡殿の切先へ。對ふは少し緩意を。御免ぞいと言ふ儘に。眞一文字に掛りけ
 る。其名は兼て輝し。照井の水に見參し。道明寺の引飯に暑氣をはらし申さんと。地只一呑の廣言も。心なるかな
 忽に。眞甲微塵に打碎かれ茂り合ひたる道芝を。血汐にこそは染めたりけり。調三木の隼人入代はり。疊掛けて打
 つ太刀を。丁々と受流し左手へひらりと引つばづし。地返す刀に諸足を。高股掛けて切落され。堤の原をころ／＼
 ころり／＼とこけ廻る。名にしお神酒の徳利と。フシにつこと笑うて立つたりけり。調義連が郎等に。明石二來とい
 ふ法師。地望む所の大將を。松に來る風なつかしと。持つたる長刀水車。ころり／＼くる／＼くるかと見れば明
 石坊。二つになつて須磨の月。波爰もとや泡沫の。フシ哀れはかなく成りにけり。調本より八郎平常がごと味喰汁の
 はしらかし。いか物喰の菜入らず。軍は殊に好物にて。はね箸は致さぬに佐原殿の蒸肴。地葛溜の鹽加減。ぬくもりの
 冷めぬ間に。賞翫致すと駈向ふ。氣色は刀八毘沙門の。フシ阿修羅を追ふが如くなり。地流石佐原の十郎も。手綱
 控へて支へしが。調片岡が切先に。馬の太腹切さげられ。地只一跳にはね落され後陣をさして逃てんげり。地主討た
 せじと押隔たる。郎等共を入郎が。死物狂ひの荒軍に。はらり／＼と難倒され。井地はむくろに埋れて。フシ深田は
 血汐ぞ満ちたりける。調只一筋の馬踏故。左右を許す油斷にて。堤の下より射上る矢片岡が咽笛に。過たずはつしと
 立つ。軍にはし疲れたり。大事の急所もなく。よし／＼今は是迄と。刀を咽に突通し。形は舛に藏せども。譽れは上古
 末代に。類なすの。三重青嵐。フシ共に靡す。白旗は雲間に出づる弓張の。六日の月も晝の影光堂の西面。若葉は
 埋めぬ櫻が谷龜井の六郎重清は。萌黄匂の腹巻に。五枚甲の高角を。内にくゆらす名香は夕の烟ほの／＼と。海士の
 焼さし汐釜も浦に傳うて艸摺も。絨も匂ふ出立にて。得手を提たる十文字。やり過せじと頼朝の。本陣目かけ匿出し
 は。山路を過る郭公。枝を放るゝ翼にて。フシ見かへる氣色も無かりけり。地寄手も見るめ四つめ結。旗も士卒も靡せ

て。佐々木の三郎盛綱軍勢に聲かけて。詞高館殿のお腰付。長門印籠。フシ餘すなと下知の采。地詞に迫る丸太の森次。麥野の五郎龍虎の如く駈向ふ。詞シヤ物々しと重清は。地會經に餘る花菖蒲。六日の露の面ざしも色白く柔和にて。心は焚喰張良が。今度の軍を限りぞと。鎧物の具構ひなく刺通し突通し。手痛く働く鎧先に何かは以て堪るべき。地二人一度にかつばと伏す。象鼻に巻し百合の花。フシ形もためず成りにけり。地此勢に追立られ。引追けば入替り。後陣の若手加勢の組。殊更よき太刀佩いたるにや。柴田の四郎といつし者。刃向いたる長刀を。冠の板にて受流し。かけて通るを飛違へて横に難く。柴田が腰を車斬り。二つになつて失にける。地今は是迄軍はしつ。最後の廣言夕影も。待たぬ命は陽炎の飛ぶが如くに勇立只。詞頼朝公を討取つて鬱憤の散せんと喚叫んで駈出す。地爰を大事と盛綱も。防ぎ戦ふ其中に。詞照井が弟鷹野四郎身不肖には候へども。鷹野が鎧と鎌倉に人の知つたをお相ぞと。素鎧構て指向ふ。重清は十文字。兩將互に手だれと手だれ。地人違ひ駈けちがひ。甲の星は打物の。金光耀き。きら／＼。きらり／＼ときらめくは。フシ紅蓮の水も斯くやらん。地骨も碎け身も裂けと。暫し戦ふ其内に。詞鷹野が高股突通され瘻む所を重清は。透さずすと折入つて取つて抑へて首を掻き。立上らんとせし所を高井の源吾下り合つて。龜井が鎧の透間をば。疊かけて刺通し。終に首をぞ打落す。地甲も匂ふ鬘髮蒼る梅も綻びて。朝の風に夢破る。浮世の眠。三重醒めて行く。地山の手を指し馬上にて。和泉の三郎忠平が。鎌倉殿を二太刀と。鱗の魅入れし性根さへ。時至らんと白糸絨長刀振つて駈廻る。責口は畠山。懸命名譽の重忠が。氣轉奇妙の下知なれど去年の手徴に進み兼ね。日の目拜まぬ。鷹。フシ穴へも這入心地せり。詞仁科團藏踊出て。本田に素繩引せんと。大太刀振つて切掛る。忠平は誰ぞとも白柄の長刀追取延。地打て来るを請流し。ひらりと返す切先に。眉間をちよいといはされて。途方失ひ東やら。仁科は馬の下腹へ。フシ我と飛入る夏の蟲。地絨緞の鎧武者。いづれあやめと二人連。引きぞ煩ふ和泉殿廣瀬兄弟見參と。得物／＼を掻い込めて。詞去年の暮の大節季。賜はる首が二つ迄。つさが悪うて

義經新高館終

いき悪ひ。此算用て帳消と。左手右手へかけ向ふ。忠平につこと打笑ひ。古借錢の御算用。扱は命の割残り。厘毛よりも猶輕く。しのぎはえんくかつかくと。地暫しが間戦ひしが。左右拂ひし長刀の。水車にや乗つたりけん。兄弟一度に二二ンが四。フシ割つてはかなくなりけり。地本田の小五郎近富は。關東無二の大勇力。小櫻絨の胴丸に。連錢鷹毛に鞭打つて。好む處の長刀を柄も四尺又も四尺。合せて八尺の長刀を扇の如く閃かし。駈け廻り追ひめぐり。くるりくくるく。車の火花は切先に馬は巴に白泡はみ。五色に縊れる厚總は。羽をひろげしかうらんの。フシ番が舞ふに異ならず。地互に蹴立る馬煙。孰れを和泉。孰を本田と分けざりしが。兩馬が合に落ちさまに。本田を下に組敷いて。透さず首を揺落し。詞立上らんと振りかへれば。早高館に煙立ち。地火煙のぼつて雲を燒く。神變鬼没の三郎も。長刀からりと彼所へ捨て。運盡きて忠平が。最期の體を末代の手本にせよと云ふ儘に。腹十文字に掻切つて活るが如き仁王立ち。天晴惜き武士と。響る聲又勝鬨の聲も。静けき源や。君仁愛の深ければ。臣も禮義を失はず教の道も亂れざる。國家安全億萬歲變らぬ。御代こそ目出度けれ。

